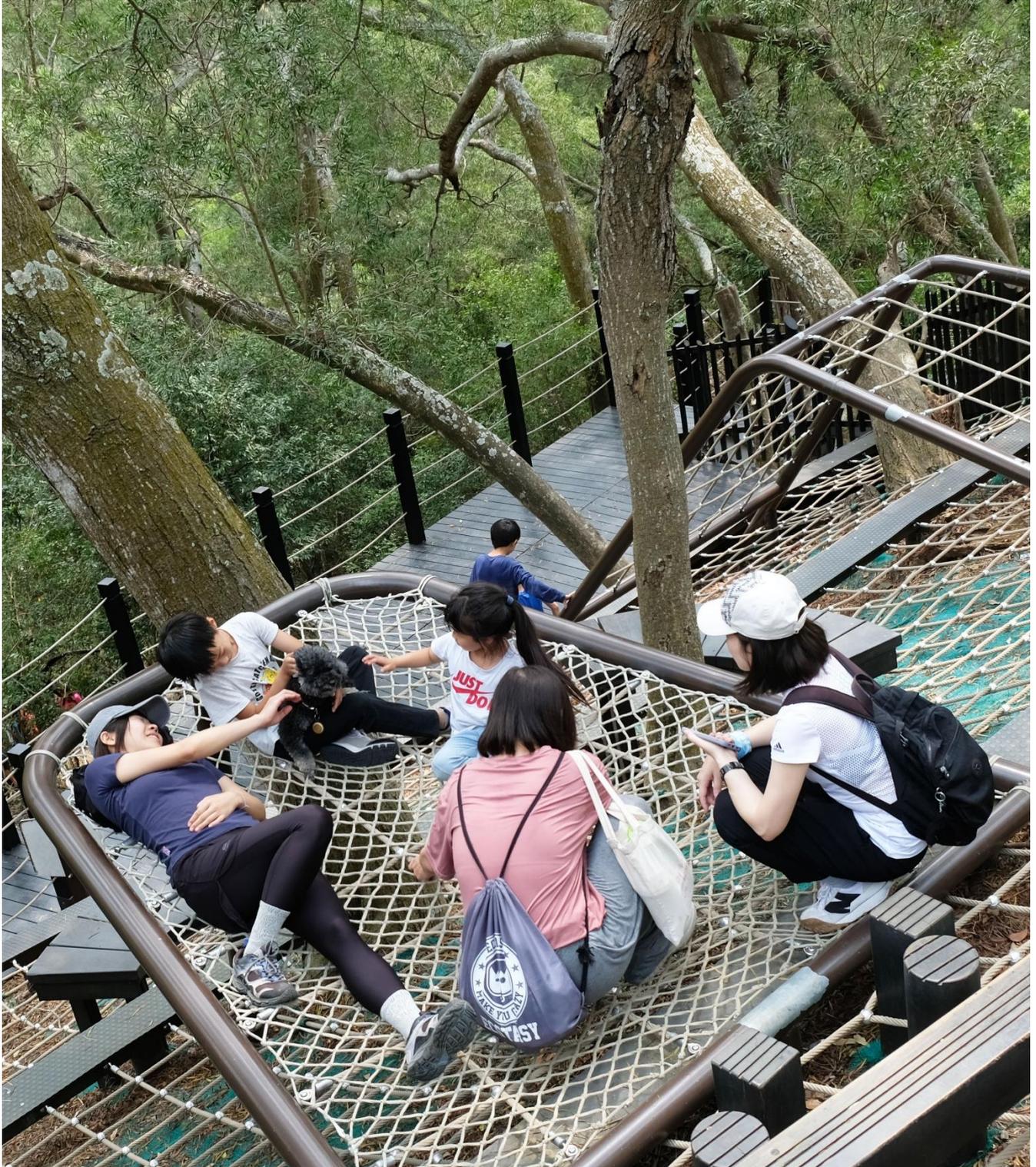




301号
2025/3

日中文化交流市民サークル「わんりい」
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



台中大坑歩道：台中市の東に「大坑歩道」というハイキングコースがあります。東京の高尾山のような感じですね。12本のコースがあって難易度が色々あり、家族連れや、グループ連れで賑わっています。最高峰は頭寮山(tóukeshān)で標高859メートル。尾根には小ピークがたくさんあり、お弁当・お茶飲み用の休憩所や、写真のように寝転ぶ場所もあります。

(2024年4月 台湾台中市にて 佐々木健之)

‘わんりい’ 2025年3月号の目次は18ページにあります

今月のお話は、唐代の伝奇小説として中国では良く知られていますが、日本では同じような意味で、違う四字成語が有名です。

・ ▶ ・ ▶ ・ ▶ ・ ▶ ・ ▶ ・

唐の時代に淳于棼じゆんうふんという人がいて、ある年の誕生日に祝い酒を飲み過ぎて、庭の大木の下で眠ってしまいました。

槐安国の使者が彼を自分の国へ案内し、国王は王女を彼に嫁がせ、南柯郡の知事に任命しました。

彼の五人の息子はみな政府の高官になり、二人の娘は共に王族に嫁ぎました。周りの人々は彼の成功に嫉妬して、ある人が、国王にでたらめな淳于棼の悪口を話したので、国王はそれを信じて、淳于棼を国外追放しました。



挿絵：満柏画伯

槐安国を追い出されるとすぐに、淳于棼は眼を覚めました。彼は自分自身が、相変わらず庭の大木の下で横になっているのを見て、今までのことがすべて夢であったと気が付いたのでした。

・ ▶ ・ ▶ ・ ▶ ・ ▶ ・ ▶ ・

言葉の意味：長い夢を表し、また良い夢から覚めた時のむなしさの喩え。

言葉の使い方：努力して勉強しなければ、どんな夢も南柯の夢となってしまうのだよ。

・ ▶ ・ ▶ ・ ▶ ・ ▶ ・ ▶ ・

このお話は、唐代の李公佐りこうさという人が書いた「異聞伝」という本の中に収められています。夢の中での人生で栄枯盛衰を経験し、実生活で栄華を求めることにむなしさを覚える話です。

同じようなお話ですが、日本では、同じ唐代の沈既済という人が書いた小説「黄梁之夢」、日本語では「黄梁一炊の夢」というお話の方が良く知られているのではないのでしょうか。

唐代、玄宗皇帝の御代、盧生ろせいという青年が、何回目かの科挙受験の旅の途中に、邯鄲の宿屋で食事を待つ間、不思議な老人と同宿し、科挙になかなか合格しないことを話すと、老人は盧生に枕を貸してくれました。

盧生は、その枕を借りて横になると、直ぐに科挙に合格しました。役人になり活躍しますが、あらぬ疑いを掛けられ、冤罪で死罪になるところでした。運よく疑いが晴れて、以後はトントン拍子

に出世して、王に信頼される側近となり、人々にも尊敬されて、美しい妻を娶り、賢い子をもうけ、順風満帆の人生を送りますが、高齢になり、やがて病を得て、人々に惜しまれながら世を去りました。

死んだ後、あくびをして目が覚めると、未だ旅館で食事が出

来るのを待っているところでした。宿屋の主人が焚く黄粟は、未だ炊き上ってもいませんでした。

枕を貸してくれた老人は、穏やかに微笑みながら盧生に話しかけました。「人生の栄枯盛衰を経験して見て、どうだったかね？」

ここで初めて、盧生は、この老人が有名な道教の道士・呂翁ろおうであると悟り、同時に、栄華を極めた後の空しさにも思い至り、以後、この道士に師事して、道教を極めることに専念したのでした。

このお話はまた、「邯鄲の夢」とも言われて、日本でも、古くから小説や歌舞伎に翻案されて親しまれていますね。

ところで、このコラムは今月で 80 回を数えます。考えてみれば 8 年間、毎月お付き合い頂いたこととなります。本当に有難うございました。

新年度、4 月からはこのコラムでは、毎月、趙迪さんの薬膳料理に関するお話を書いて頂きます。どうぞご期待ください。

鄭州・安陽の一人旅(つづき1)

文と写真=村上直樹

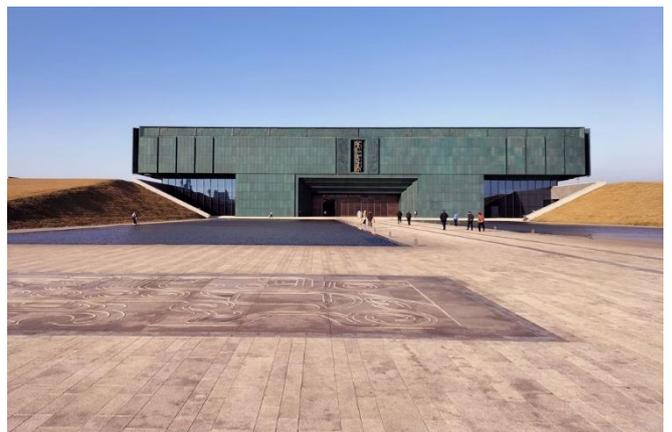
今年も、去る1月18日に一般社団法人・日本河南同郷会主催、鄭州大学日本校友会共催による新年会が開かれ、私も縁あって参加した。会場は東京のJR亀戸駅近くにある中華料理店「九龍城飯店」である。例年どおり、来賓挨拶、乾杯に始まり、歌や踊りといった出し物の他、豪華賞品がもらえるゲームなど、大いに盛り上がった。今年は、中国政府(中華人民共和国国務院僑務弁公室および中華全国帰国華僑聯合会)と河南省政府(河南省人民政府僑務弁公室および河南省帰国華僑聯合会)から、豪華な記念品も提供された。海外在住の同胞に向けたお祝いのメッセージ(新春家書)が添えられている。とくに「寰“豫”同心、四海迎春」(オール河南、心は一つ、世界中で新春を迎える)と題された河南省政府からのメッセージでは、昨年1年間の河南省におけるさまざまな活動に対する海外河南人の協力に感謝するとともに、本年も故郷・河南省に対する関心を持ち続けてほしいと語りかけている。日本河南同郷会の活動は、関西支部も設立されるなど、ますます充実してきており、河南省政府の期待も高まっているのであろう。

さて、私はその河南省の鄭州市と安陽市を昨年(2024年)の11月21日から30日まで旅行した。以下、前回(2025年1月号)に引き続きそこでの見聞を綴りたい。今回の旅行では、まず、鄭州市で商(殷)代前期の遺跡を見学し、24日(日)にいよいよ商代後期の都・殷墟遺跡を訪れるため高速鉄道で安陽市に移動した。鄭州市のホテル玄関前でタクシーに乗り、15分ほどで高速鉄道の駅「鄭州東」へ。「十堰東」(湖北省)発「北京西」行きG1590の乗車券は前日すでに購入済みである。定刻11:54発車。7~8分後には時速300km前後に達する。車内は清掃が行き届いており、乗り心地もよい。12:24ごろ途中の「鶴壁東」着。ここで後続列車に3本追い抜かれ20分ほど停車した。プラットフォームに降りることができるので、愛煙家にとってはありがたいようだ。定刻12:59に「安陽東」に到着した。すぐタクシーに乗り文昌大道と中華路の交差点にある「安陽世貿中心

美居酒店」(Mercure Anyang Downtown)に向かう。チェックイン後、近くのレストランで遅めの昼食をとり、周辺を散策した。

夜は部屋で、「小紅書」などのインターネット情報を頼りに、29日(土)に鄭州市に戻るまで実質4日間の具体的計画を立てた。殷墟はかつて2008年3月に見学したことがあるが、その時は正に「走馬観花」で、予備知識もほとんどなかったため、今回の再訪はかなり期待していた。一般に殷墟観光というと「殷墟博物館(新館)」、「宮殿宗廟遺跡」、「殷墟王陵遺跡」の三か所を巡ることを指すらしい。さらに、いろいろ調べていると、たまたま「全国甲骨文書法(書道)名家作品邀請(招待)展」という興味深い催しが22日に始まったことを知る。しかも会場はホテルすぐ近くの「安陽市文化館」。時間があれば、行ってみることに決めた。

翌25日(月)は朝から雨がかなり降っていた。ホテル前でタクシーはすぐ拾えたものの、雨天と週の始めが重なったため、渋滞が相当ひどかった。渋滞がなければ20分ほどのところ、1時間もかかって殷墟博物館(新館)前に着いた。近代的な構えの巨大な建物だ。敷地面積17.5万m²、建築面積5.1万m²、展示スペース2.2万m²であり、地下1階、地上3階の地上部分に複数の展示室がある。旧博物館(2005年開館)の後継として昨年(2024年)2月に開館した。正面には当時の殷墟を指す「大邑商」の甲骨文字が掲げられている。有人の入館料売り場でパスポートを見せると、年齢を確認して、60歳以上は通常大人80



殷墟博物館新館(2024年11月撮影)

元(約1,600円)のところが無料だった。まことに有難い。

まず、商(殷)代について全体的に理解するため、1階の「探索商文明」室に入る。あらためて、商代は、現在の鄭州市に都があったとされる前期(中国語では「早期」)、第9代の王・中丁、以降の中期(中期)、さらに中興の祖・第21代の王・武丁以降の後期(晩期)の3期に分けて捉えられており、殷墟に都が移ったのは後期であることを確認する。つづいて、「車麟麟、馬蕭蕭」(車はゴトゴト音を立て、馬はヒヒンと嘶く)と題され、馬車の遺跡を展示した部屋に移る。商代では、かなり精巧に造られた馬車が日常の交通だけでなく戦争、儀式、狩猟で用いられ、それは王侯貴族といった高い身分の象徴だった。車輪は2つで2頭の馬が引く構造である。この展示室では殷墟の墳墓から出土した埋蔵品の馬車を復元して多数展示していた。死後の利用に資するようと、誠に残忍にも、馬や御者も殉死させられている。

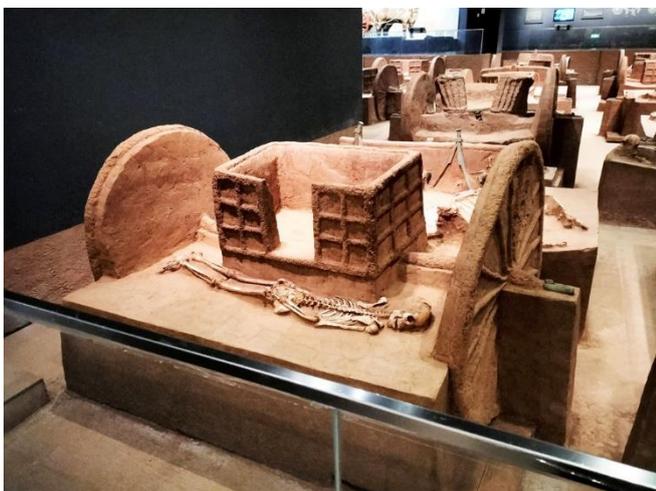
2階に上がって「偉大的商文明」室に入る。正面には世界最大の青銅器とも言われ、殷墟遺跡の出土文物を代表する「司母戊鼎」が飾られていた。ただし、残念ながら、これは複製品で実物は北京の中国国家博物館に所蔵されている。「甲骨耀世、文字大成」というコーナーもあり、甲骨文字について詳しく説明されていた。甲骨文字とは亀の甲羅あるいは牛の肩甲骨などの動物の骨に刻まれた文字であり、現在発見されている最古の「漢字」である。亀の甲羅等はずっと古代の王が神に問いかけてその行いを決める占い(占卜)に用いられていた。具体的にはそれらを火で炙り、出来た割れ目の形状によって吉凶を判断

していた。商代後期になるとそのような使い方に止まらず、そこに文字(甲骨文字)を刻することによって占いの時期、内容、結果等を記録するようになった(「卜辞」という)。

殷墟遺跡からはすでに16万余りのそうした記録付の甲骨片が出土している。そこには約4,500の文字が確認されており、その内、約1,500字が解読されている。逆に言うと、未だ解読されていない文字が3,000もある。因みに、もし解読に成功すると「中国文字博物館」から1字につき10万元(約200万円)の賞金がもらえるそうである(『人民網日本語版』2023年12月6日)。甲骨片の中には1、2文字しか刻まれていない小さなものから、100字以上が刻まれている大きなものまである。卜辞の刻まれた亀の甲羅をト甲、牛の肩甲骨など動物の骨をト骨という。写真は展示されていたト甲(上部に見える)とト骨である。

つづいて3階に移動し「子何人哉」(子とはどんな人でしょう)と題された、1991年10月に殷墟花園庄東地で発見された甲骨片に関する特別展示室を観る。この発見は1991年の「全国十大考古新発見(発見)」に選ばれている。ここで発見された甲骨片は欠片ではなく完全なものも多い。「子」とはそこに記録されている占いを行った人物である。この「子」は、武丁およびその妃・婦好との関係が極めて密接だったことがわかり、武丁の実子であると推定されている。占いの対象は、祭祀、貢納、軍事、狩猟、飲食、娯楽など日常生活全般に亘っており、商王朝における王子の生活を知る上で歴史的価値が極めて高い。

(つづく)



埋蔵品の馬車(2024年11月撮影)



ト甲とト骨(2024年11月撮影)

「世界遺産のカラコルムに行って来ました」とお伝えすると、「トレッキング?」、「体力は大丈夫だった?」などの反応が戻って来ることが多かった。それは2つのカラコルムの混同に因るものであるが、実は筆者もそれほど両者を区別して来た訳ではなかった。何となく近くのような気がしていた。

2つのカラコルムの一つは、今回訪れた、モンゴル帝国の首都として、モンゴル高原中央部に存在した「古都カラコルム（現在はハラホリン「漢字では哈刺和林」）であり、近くに在る「カラコルム山」という黒色の石材が取れる山に由来し、周辺には現在も安山岩や玄武岩などの黒い河原石が転がり、雨水などで濡れると地面が黒っぽく見えるらしい。

もう一つは「カラコルム山脈」で、エベレストに次ぐ世界第2の高峰「K2」を筆頭に60座以上の標高7,000メートル級の山々が連なる、パキスタン・インド・中国の国境付近に横たわる山脈である。広義のヒマラヤ山脈の一部であるが、狭義のヒマラヤ山脈とは独立した山脈となっている。

試しにグーグルマップで距離を計測してみると、カラコルム博物館からK2山頂まではモンゴル南部や新疆ウイグル自治区を挟み、2485キロもあった。「カラコルム」とはテュルク語・モンゴル語で「黒い砂礫」という意味なので、それに由来した地名が別々に2つの地域に残されたのであろう。かつてのモンゴル帝国の壮大な版図に圧倒される。

■「エルデネ・ゾー」の西門に入る

西門を潜ると開けた草原が目に入って来た。ただし、その広がりは一瞬と取り囲んだ城壁で行き止まりになっている。西門から入って正面方向に当たる東側の奥には殆ど建物は立っていない。城壁に沿って一列に並ぶストウーパが印象的である。



東側の城壁とそれに沿って並ぶストウーパ



左が「ダライ・ラマ寺」、右奥に見えている「大講堂」

相変わらず雲が分厚く、青空は全く見えず、空は薄暗い感じだが、直ちに雨が降る気配は無い。時刻は午後3時半を回ったところである。

草原の中を続く石畳の順路の傍らにある石は過去の建築物の礎石だった。東に向かって左側に、つまり城壁内の北半分に建物群が集中している。

順路のすぐ近くに建つのが、ガイドブックに拠れば、「ダライ・ラマ寺」である。その屋根越しに見える特異な形の塔は「ソボルガン塔」らしかった。「ソボルガン塔」は巨大な仏塔で、「墮落した僧侶たちを戒めるもの」とガイドさんの説明があった。

その奥には、仏教寺院のイメージとは懸け離れた白い優美な建物が見えている（ガイドブックによれば「大講堂」らしかった）。

順路は左に（北）に向かい「ダライ・ラマ寺」の横を進むと「ゴルバン・ゾー」の正面に出た。「ゴルバン・ゾー」は名前の通り、3基のそっくりな仏堂が塀の向こうに並んでいる。

■ゴルバン・ゾー（三寺院）境内に入る

塀の向こうに行くためには手前の屋根付きの建物を通す必要がある、此処で拝観料を徴収された。



そっくりさんが3基並んだ「ゴルバン・ゾー」と料金所

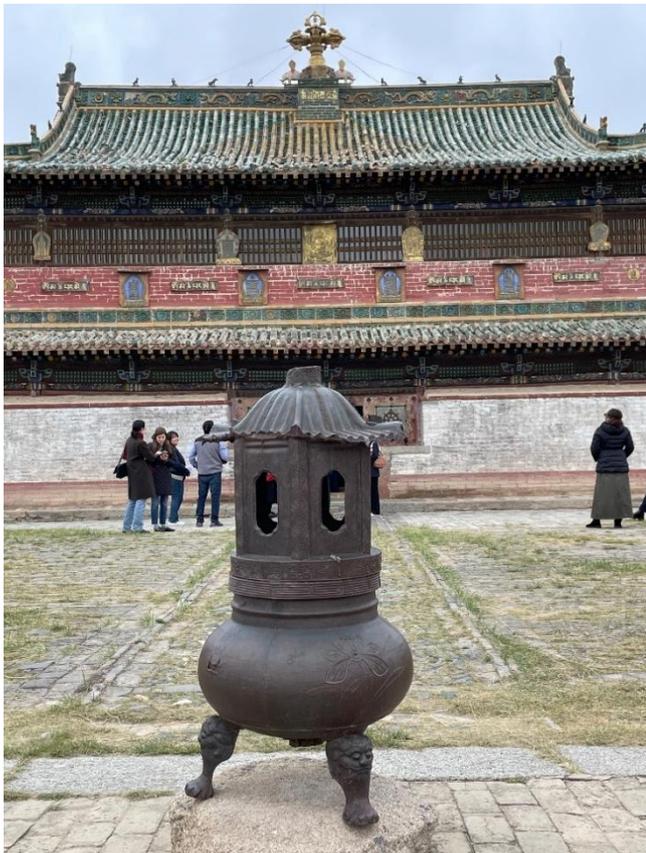
ガイドさんが払ったのは1万 Tg (400円あまり) のようだった。この塙の中だけが有料ゾーンで、他の建物は宗教施設として拝観料の徴収はなかった。

塙の中に入りゴルバン・ゾーの正面に立つと、それぞれが堂々とした景観で、「仏堂」というより3基の「本堂」というべき迫力であった。

中央がモンゴル高原にチベット仏教を広めるために、「エルデニ・ゾー」を創建したアブタイ・サイン・ハーンが建てた寺院で、これとそっくりな左右の寺院は、息子と孫が建立したもので、それぞれ「西寺」、「東寺」と呼ばれている。

ふと、岩手県平泉にある世界遺産の「中尊寺金色堂」を思い出した。奥州藤原氏の藤原清衡が極楽浄土を具体的に表現しようと、当時の工芸技術を駆使して建造した仏堂であるが、「清衡、基衡、秀衡」の三代のミイラが安置されていることが知られている。それぞれのミイラは3つの須弥壇しゅみだん (中央壇・西北壇・西南壇) 内に納められ、中央壇の棺に眠るのが藤原清衡で、壇上には国宝の仏像11体が安置されている。他の二つの須弥壇の上にも、中央壇と同様、11体の仏像がコピーされたかのように安置されている。

寺院の外観はチベット様式ではなく、中国の伝統的仏教寺院の瓦屋根の造りで横に向けて反りがあ



「ゴルバン・ゾー」の「中央寺院」の正面

る。大棟の中央に大きな宝塔が安置されているのが目を引く。中央寺院の宝塔が左右の寺院の物と比べると明らかに大



屋根上に見えた「三匹の走獣」

きい。宝塔の両側に見えているのは「走獣」みたいだと思って、軒先に目を転じたら、やはり「走獣」(最も少数の「三匹」の形式) が居た。中国河北省の承德市にある「外八廟」でお馴染みだったので、嬉しいような、懐かしいような気がした。

瓦屋根は二層になっており、正面の扁額が掛けられる位置に、金色の仏像のレリーフが飾られている。その横に、間隔を置きながら、金色の護符(?) のようなレリーフが左右に二つずつ見える。瓦、軒下そして壁面は細やかな装飾で飾られている。

■「中央寺院」の中に入る

まず、真ん中の中央寺院を拝観することにした。入り口の両側の壁に記されていたのは「輪宝」であった。これにも仏教寺院であることが実感された。

人工照明の無い内部に足を踏み入ると、あかり取りの窓から入り込む光の中でも、天井から下がる装飾が色彩豊かで、煌びやかであり、四方の壁際は一段高くなって、大小さまざまな仏像が安置されている。正面を見ると、煌びやかな装束で間近に立つ等身大に近い仏像たちと相対することになった。ややインド風の顔立ち、表情だが、日本で見る仏像の穏やかな顔と比べて、大きな違和感はない。

その横の透明な衝立の向こうに、一回り大きな仏像が鎮座していて、拝観者は視線を上げて仰ぐ形になる。これらは仏陀と弟子たちの像に違いない。

振り返って、入り口を見ると、入り口の両側に等身大を超える大きさの像が建っている。ともに、顔や手は青黒く、目を見開き、歯を剥き出し、威嚇する表情である。頭上の五つの髑髏から金の飾りが突き出ているように見える。一方は、馬を従え、手に槍を持ち、服装は京劇の將軍のようである。他方は閻魔王のような衣装で、筆の穂先が両端に付いたような棒を両手で水平に持っている。(つづく)

●資料：

- ・「地球の歩き方 モンゴル」(2024年～2025年版)
株式会社 地球の歩き方

嶗山の伝説

訳：一瀬靖子／大槻一枝

年寄りたちの話によると、「^{ろうざん}嶗山は昔、「^{ごう}鰲山」といった。鰲山に関しては素晴らしく美しい物語があるのじゃ！」

ずっと昔、果てしない東海岸一帯には、山もなく峰もなく、周囲百里は見渡す限りの草原であった。その草原に大小の家が四十八軒あり、村を成していた。「山に近ければ山によって生活の道を立て、海に近ければ海によって生活の道を立てる」という。

東海灘の人々は、あるいは網を打って魚を捕り、ある者は荒地を耕して糧食を作って暮らしていた。牛を飼い、馬を育てて生活している者もいた。生き方はそれぞれ異なるが、皆食べるものの心配もなく、着るものにも事欠かず、憂いのない日常を過ごしていた。

ところが、この年、思いもよらず天から災いが降って来た。東海に十万年の修業を積んだという鰲（大亀）が現れたのだ。この亀がどのくらい大きいかって？ 大亀は尻尾を上げると、東海に高い島のように直立し、体を浮き上がらせると大きな陸地ができる。四つの爪を開くと、東海に万丈の波が立ち、大きな口を開けて水を飲むと、大潮を招いた。この亀は強い力に任せて海中の生き物をいじめ、穏やかな生活を乱したばかりか、牛馬まで

巻き込んで人々を苦しめた。

こうして今まで豊かで平和であった東海灘は、人々の楽しげな歌声も聞こえず、笑顔も見られない村になってしまった。

海に面した王家村に、勇敢で賢い兄妹がいた。兄の名は大智、今年二十歳。妹大勇は十八歳になったばかり。彼らは大亀が大波を伴ってやって来るのを見ると、怒り心頭、地団駄を踏み、唇を噛んだ。大智がヤス（魚を刺してとる漁具）を構えてヒョウと大亀を狙って撃った。しかし、大亀は口を開け、太く大きな水柱を吐き、ヒューッと兄妹を五里の遠方まで吹き飛ばしてしまった。兄の大智は地に叩きつけられ、したたかに頭をぶつけて大きなコブを作り、妹大勇は草地に落とされ全身でもんどり打った。兄はやっと起き上がり、びっこを引きながら妹に近づいて、

「吹き飛ばされても、私たちは死なずに目覚めた。父母兄弟を救うためには、あの大亀を征伐しなくてはならない。それには俺たち二人だけでは無理だ。頭を使わなくちゃ」

妹は足をさすりながら、
「兄さん、私もそう思うわ。でもいい知恵が浮かばない」

兄は、「諺に“三人寄れば文殊の知恵”と言うだろう。遠くても難しくても、この機会にその文殊様を訪ねてみないか？ 俺は天下の老若男女が一つになれば、大亀一匹を征伐できないことは無いと思うよ！」

妹は兄の話聞いて手を打って喜び、立ち上がって「そうね“善は急げ”よ、すぐ出かけましよう」と言って、兄妹は村人に別れを告げ、西に向かった。三十三の川を渡り、三十三の峰を越えて林にさしかかると、白髪で顔中皺だらけの老婆が、大きなアカシアの木の下に座って綿花を紡いでいる。

兄妹は急いで傍らにより、丁重に、「東海の十万



山東省青島市にある「嶗山景区」（「百度百科」より）

年力の大亀を退治するには、どんな方法があるでしょう？どうぞ教えてください」と言った。

老婆は糸車を動かしながら、「大勢で糸を紡ぎ、太く長い綱を撚れば、十万年力の大亀も動かす綱ができるだろう」と言った。

兄妹二人は、なるほどと老婆の話をしっかり胸に刻み、礼を言って、また道を急いだ。六十六の川を渡り、六十六の峰を越えて赤土の峰に着いた。突然峰の麓からトンチンカンチンと鉄を打つ音が聞こえた。二人が音のする方を辿って行くと、十数軒の人家が集まった村があり、片肌脱いだ職人が鉄を打っている。

兄妹はそばに寄り丁重に、「鍛冶屋さん、どうぞ教えてください。東海の十万年力の大亀を退治するにはどんな方法があるでしょう？」

年寄りの鍛冶屋は自信ありげに、「お若い、その答えは人々が今までやってきた職業によって皆違うだろうが、私に言わせれば、大勢の鍛冶屋から鉄を集め、四つの鋭い、重さ万斤の釣り針を作るんだ。その釣り針を使えば、万年力の大亀も釣り上げることができるだろう」

二人は鍛冶屋の話をしっかり心に刻み、礼を言って別れ、また道を急いだ。

九十九の川を渡り、九十九の山を越え、兄妹二人は小さな部落に着いた。ふと見ると街頭に坐って靴を縫っている職人がいた。

二人は、「靴職人さん、どうぞ教えてください。東海の十万年力の大亀を退治するにはどんな方法があるでしょう？」

職人は針の手を止めて、「お若い、私は一生、針、糸、牛皮を相手に生きて来た。牛の皮を集めて大きな牛を作り、中に草を詰めて、食べさせれば、十万年力の大亀でも釣り上げることが出来るだろう！」

兄妹は靴職人の話をしっかりと心に刻み、さらに歩き続けた。兄妹が道を急いでいると、髪も髭も眉毛も真っ白で、その上、白い服をまとった老人が向こうから来るのに出会った。

二人は老人に礼儀正しく、「ご老人、どうぞ私達に教えてください。どうすれば十万年力の大亀を

退治し、人々のために害を除くことができるでしょう？」

老人は、「大亀退治はそう難しいことではない。一に大勢で紡いだ大量の糸で綿繩を綯う。二に大勢の職人が打った多くの鉄を集め、四つの針が鋭く尖った大釣り針を作る。三に多くの人々が献じた牛皮を縫い合わせ草を詰めて、大きなぬいぐるみを作る。さらに、力は山を抜き、何事にも動じない指揮者がいれば、大亀を岸に引き上げて退治するのは難しいことではない」

兄妹二人は老人の言葉を聞いて喜び、同時に悩んだ。喜んだのは、ついに大亀退治の良い方法が見つかったからである。悩んだのは、どうやって盤石の指揮者を見つけるかで、二人は老人の前に跪いて懇願した。

「ご老人、人助けをするなら、とことんまで助けてください。教えるなら最後まで教えてください。どうしたら盤石揺るぎない指揮者を見つけ出すことができるでしょう？」

「世の中に難しいことはない。怖いのは誠実な心が無いことじゃ。あなた方二人、本当に人々のために害を除く真心があるなら、私を背負って千里の道を行きなされ。そうすれば、君たちが盤石の巨人になることを、私が請け合おう！」

二人はこれを聞くと喜んで立ち上がり、

「大亀を退治し、人々のために害を除くことが出来れば、ご老人を背負って千里は言うに及ばず、万里の道に行くことも厭いません。」

言い終わると、兄の大智が老人を背負って家の方角へ歩き出しました。老人は枯れ木のように痩せてはいるが、背負うとずっしりと重く千斤の重ささえ感じた。しかも大智は一歩行く毎に背が一尺も伸び、十歩も行くと力は千鈞（昔の度量衡の単位。1鈞は30斤に相当する）も増し、老人を背負えば背負うほど力が満ちて来る。大智の歩みは決して速くはなかったが、後ろの大勇は小走りでも追いついて行けないほどである。

こうして大智は、五百里も歩くと天を衝き、力は山を抜く大きな体になっていた。大勇は走り寄って兄の腕にすがり、

「兄さん、貴方は、もう力は山を抜く大物になったでしょう。残りの五百里は私に負わせて！」「と言いながら、老人を兄の背から受けとった。

大勇は老人を背負って歩き、大智と同じく一歩進んでは体が一尺伸び、十歩進んでは千鈞の力を得て、歩くほどに背は伸び、力を増し、家から五十里ほどの西海岸に着いた時、彼女もまた天を支え、力は山を抜く大物になっていた。

この時、背中の老人の声が聞こえた。「若者よ、人々のために害を除くという君たちの思いに嘘はなかった。心が正しければ、きっとやり遂げられる。今、君たちは山をも抜く力持ちじゃ。さあ、私をここに下ろして家に帰り、早く、あの大亀を退治しなされ」

大勇は老人の言う通り、しゃがんで老人を下ろそうとしたが、両手を緩めたと同時に、山が裂けるかと思われるような大きな音が響き、海水が高い水柱を上げた。白衣の老人は何処へ？姿は見え、高く大きな白い石の山が島となって海に半身を沈ませ、半身を浮かべている。(石島は、白衣の老人が変身してできた島なので、人々はこれを“人島”と呼び、後に海水に洗われて黒くなったので“隠島”と呼ぶようになった)

兄妹は大きな天変地異を目の当たりにして、あの老人は只者ではないと跪いて島を礼拝し、急いで家に戻った。

話を伝え聞いた四十八村の人々は、一斉に綿入れや布団を持ち出し、中の綿を抜き出し、白い綱を燃った。また、ある者は鍋釜を持ち寄って釣り針にと献じ、ある者は藁葺き屋根を巡って草を抜き取り、牛皮のぬいぐるみにと献じた。

四十八村の人々の協力によって、材料は瞬く間に揃った。兄妹は夜を日に継いで、重さ万斤の爪を四個作り、先の長い大きな釣り針を作った。そして、また五日五夜かけて釣り針を草の中に潜ませ、牛皮を縫い合わせてぬいぐるみを作り、夜の間に東海の浜に運び出した。

最後に、太く長い綱の端をぬいぐるみの牛の口から伸ばし鼻に結わえ、別の一端を二十里離れた草原にいる二人にしっかり握らせ、大亀が食いつ

いたらすぐに、浜へ引き上げる手はずを整えた。

この日はちょうど八月十五日。月が出る時分になって、大亀は深い水の中から顔を出し、またひと騒ぎを起こそうと企んでいた。大亀が月の光を受けて見渡すと、浜には小山のように大きい牛が立ち、海の風を受けながら尻尾を振っている。大亀は涎を垂らして牛を見つめていたが、次の瞬間、波に乗り、飢えた虎のように襲い掛かり、大きな牛のぬいぐるみを一口に呑み込んだ。

遠くに離れて見ていた大智、大勇が手にした綱を引くと手ごたえを感じ、すぐ両腕で力いっぱい綱を引いた。大亀に呑み込まれたぬいぐるみの腹には、四つの鋭い釣り針が隠されている。彼ら兄妹が強く綱を引くと、ぬいぐるみの皮が破れて尖った釣り針が現れ、尖った長い針の先は大亀の五臓六腑を深く深く突き刺した。大亀は痛さに耐えきれず水中を暴れまわった。大智、大勇は力いっぱい綱を引いた。大亀は死に物狂いで深みへ落ちていく。綱を引くごとに二人の足跡は大きなくぼみとなった。彼らは一歩引いては息をつき、綱を手繰り寄せた。十八歩を進み、十八の大きな足跡ができた。

四十八村の人々は、大智、大勇二人の兄妹が大亀を仕留めると聞いて、申し合わせたように浜に集まっていた。

“一心一意、泰山をも移す”という。四十八村の人々の力を得て、兄妹はついにあの大亀を深い海の底から浅瀬に引き上げた。西海岸の白衣老人が姿を変えた石島に来ると、兄妹は太い綱の端をしっかりと石島の石碑にがんじがらめに縛り付けた。

二人は月の光を浴びながら、人々の先頭に立って勝利を喜び合いながら、中秋節を楽しんだ。人々の顔には笑みが溢れ、村にはまた楽しい歌声が響き渡った。

その後、どれ程の年月が過ぎただろうか。大亀の遺体は南北四十里、東西三十里の山に変わった。大亀が変わった山と言うので、人々はこれを『鰲山』と呼び、山の南東では『鰲山頭』と呼んでいる。

おわり

(张崇纲搜集整理)

私の心に残る旅⑤ – 内モンゴルへの旅(その1)

樊 婷婷 (fán tíng tíng)

最近、世界各地からもたらされる気候変動のニュースの一つでしょうか、中国内モンゴルで草原を覆う大雪が降り、羊の群れを草がある所に移動させたり、国から飼料代の支援を受けたりしたというニュースをテレビで見ました。雪景色の草原を見ながら、ふと何年か前の夏休みに日本の友人を連れて内モンゴルに旅行したことを思い出しました。上海、銀川、内モンゴルの7日間の旅で、大自然を満喫した心に残る旅でした。今回はその時の日記に基づいて皆さんにご紹介します。

2XXX年8月15日(1日目)

12時に成田空港で私を入れて参加者25名が集合しました。飛行機は13時55分に離陸する予定でしたが、たいぶ遅れて結局15時に飛び立ちました。お盆休みに重なったため、空港は若者や家族連れの旅行者でいっぱい、賑やかでとても混雑していました。待ち疲れたので、飛行機に乗ると私はすぐ寝てしまいましたが、ほかの皆さんはお喋りしながらよく飲んだそうです。現地時間



東方明珠電視塔(ウィキペディアから)

18時30分頃(時差1時間、日本より遅い)上海浦東空港に到着しましたが、人数が多いので、荷物や入国手続きなど時間がかかり、空港を出たのは19時30分でした。友人である上海旅行社のZ社長とX通訳が笑顔で迎えてくれて、ホットしました。

一行は早速観光バスに乗ってレストランに向かい、Z社長が用意してくれた本場の上海料理を満喫した後、また、バスに乗って上海浦東にそびえるテレビ塔「東方明珠」へ夜景を見に行きました。

「東方明珠」は高さ467.9mで、1990年に着工、1994年に完成した上海テレビ塔で、展望台は3つ、90m、263m、350mの高さにあり、上海のパノラマを眺望することができます。1階には上海城市

歴史発展館があり、上海の街や暮らし、風習などを人形と模型で紹介しています。最上階の展望台に登って外を見ると、上海の煌びやかな夜景が360度眼下に広がっています。幻想的で、綺麗な夜景に感動しながら、上海の昔を思い出しました。

上海は昔、漁村でしたが、その後、徐々に貿易港として発展してきて、19世紀半ばに近代への扉が開けられ、激変しました。1842年、清朝がアヘン戦争でイギリスに敗れ、南京条約によって上海など5港が通商港として開港させられました。

1845年、上海にイギリス租界が設けられ、続いてフランス、アメリカの租界も造られ、のちに日本人街も造られました。外灘辺りは当時イギリス租界となり、外国の銀行や商社が次々と進出してビルを建設しました。現在は政府機関やホテル、高級レストランとして使用されながら、歴史建築として保存され、エキゾチックでレトロな上海の顔となっています。黄浦江を挟んで、外灘側は「浦西」と呼ばれ、昔の市内、向こう側は「浦東」と呼ばれ、

昔は上海の郊外でしたが、今は開発区となり、外国企業が続々と進出して、世界的な金融センターを目指し、近未来都市として建設されています。

私たち一行は「東方明珠」から降りて、外灘を散策しました。昔、娯楽の場所が少なかった時はここが恋人たちのナンバーワン・デートスポットで、いつ行ってもカップルでいっぱい、立つ場所さえなかったものですが、今は地方からの観光客や外国の旅行者で賑わっています。

歴史は常に前進し、街は変化し、人間も変わっていくものだと思います。宿泊のホテルに到着しました。

明日、いよいよ寧夏回族自治区の区都である銀川に行きます。(つづく)

中医薬膳の歴史的背景は非常に豊かであり、その発展は中国数千年の歴史を貫き、中医学の理論、食文化、養生の知恵が融合しています。

古代中国では、すでに薬膳の概念が芽生えていました。よく知られている「神農が百草を嘗(な)める」という伝説は、その起源の一端を示しています。神農氏は中国古代の三皇(伏羲・神農・黄帝)の一人であり、農業と医薬の始祖として尊ばれています。伝説によると、神農氏は約5000年前の新石器時代に生き、人々に五穀の栽培や農具の作り方を教えました。人々が病気や飢えから解放されるようにと、自らの口でさまざまな植物を試し、その薬性や食用価値を見極めました。その中から病を治すものや食用に適した植物を取り上げ、人々に伝授したとされています。

彼は「^{しゃべん}楮鞭」と呼ばれる不思議な鞭を持ち、それで草木を打つと、たちどころにその性質や効能が分かったと伝えられています。また、「茶」の発明者であるとも言われ、百草を嘗める過程で何度も中毒になりましたが、茶を飲むことで解毒できたとされています。

神農氏の功績は、『神農本草経』という書物に集約されており、これは中国最古の本草学書とされています。『神農本草経』には365種類の薬物が収録され、それらは上品・中品・下品の三つのカテゴリーに分類されています。ただ単に薬物の性質や効能を記録するだけでなく、「薬食同源」の思想も反映されており、

枸杞(クコの実)、紅棗(ナツメ)、山薬(ヤマイモ)など、多くの薬物が薬としても食材としても用いられることが示されています。そのため、神農氏は中医学と薬学の始祖として尊ばれ、中国の民間では「薬王(やくおう)」とも呼ばれています。各

地には薬王廟が建てられ、神農氏が祀られています。毎年旧暦4月28日は薬王の誕生日とされ、健康と平安を祈る祭祀が行われます。

『黄帝内経』と薬膳の発展

薬膳の発展において、非常に重要な書籍として『黄帝内経』があります。『黄帝内経』は中国伝統医学の古典であり、「医学の始祖」と称えられています。この書は、中医学の理論的基盤の一つであり、人体の生理・病理・診断・治療・養生・予防医学など幅広い内容を網羅し、後世の医学に大きな影響を与えました。

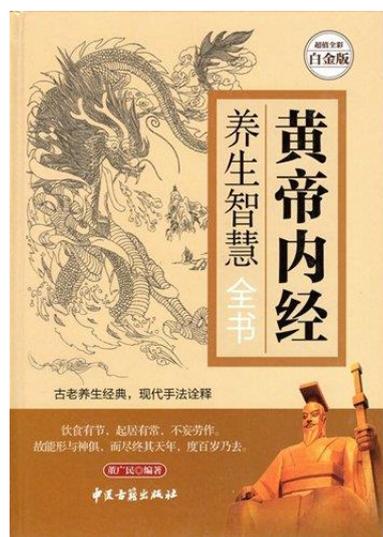
『黄帝内経』には、以下の五つの核心的な考え方があります。

1. ^{てんじんごういち}天人合一：人体は自然環境と密接に関わり、四季の変化に順応し、陰陽のバランスを整えることが重要とされる。
2. ^{いんようごぎり}陰陽五行：陰陽説を用いて生理・病理を説明し、五行(木・火・土・金・水)が臓腑の機能に影響を与えると考える。
3. ^{ぞうしよ}蔵象学説：五臓六腑の機能や相互関係を説明する理論。例えば、「心は血脈を司り、肝は疏泄を司り、脾は運化(栄養分の伝播)を司る」とされる。
4. ^{けいろ}経絡理論：経絡は気血の流れる通路であり、人体の健康に影響を与えると考えられる。針灸は経絡を通じて気血の流れを調整する治療法である。
5. ^{みびよせんぼう}未病先防：養生を重視し、食事・生活習慣・感情の調整を通じて、病気を予防することを推奨する。

『黄帝内経』は、「時節に応じた養生」を強調しています。例えば：

- 春は肝を養う：ほうれん草、ニラ、もやしなど緑色食材を摂り、情緒を安定させる。
- 夏は心を養う：辛いものを控え、適度に昼寝をして、心を穏やかに保つ。
- 秋は肺を養う：梨、白きくらげ、百合根など潤いのある食材を摂り、乾燥を防ぐ。
- 冬は腎を養う：黒ごま、黒豆など黒い食材を摂り、早寝遅起きを心がけ、精気を蓄える。

『黄帝内経』は、単なる医学書ではなく、養生の知恵を集めた不朽の名著でもあります。(つづく)



黄帝内経養生智慧全書(中国語版)

中国人の日本語作文コンクール

和田 宏

〈主催者は段躍中さん〉

中国人の大学生や高校生による日本語作文コンクールというのが、2005年から毎年行なわれている。主催は、池袋にある出版社『日本僑報社』で、後援には在中国日本国大使館などが名を連ねている。この出版社の代表が、1958年に中国の湖南省で生まれたジャーナリストの段躍中さん。段さんは、本国で「中国青年報」の記者・編集者などを経て、1991年に来日。1996年に『日本僑報社』を創立して、日本と中国に関する書籍を出版・販売する一方で、日中の友好・交流の様々な活動に尽力している。

エネルギーな段躍中さんが、20年前の2005年から始めたのが、「中国人の日本語作文コンクール」である。コンクールに参加するのは、大学や高校、専門学校などで日本語コースを専攻している中国人学生たちで、参加は学校数で中国全土の400校、応募者は、毎年3000名にのぼり、2024年までの20年間の累計で6万名を超えた。中国国内でも規模が最も大きく、知名度の高い日本語作文コンクールへと成長を遂げている。中国の若者たちが日本語で綴ったりアルな声であり、日本と中国の相互理解を促進する貴重な手段として両国の関心を集めている。この20年間、日中関係が悪化した時期や新型コロナ感染拡大など困難にめげず、段さんは、夫婦二人三脚で草の根レベルの日中交流の輪を広げ、中断することなくコンクール開催に情熱を傾けて来た。段躍中さんご夫妻の努力に敬意を表したい。

〈審査員を務める〉

日本語作文コンクールの審査は、三次に亘って行われる。凡そ3000本の作文について、第一次審査で言語学などを担当している日本の大学教授ら15人がチェックし、第二次審査では、一次審査で絞られた上位20本ほどの作文に、二次審査員10人が目を通し、内容と文法の2つの項目について各50点満点で成績を付ける。二次審査員は朝日新聞Globe編集長や大学教授など10人が務めており、“わんりい”会員で、元NHK記者・神奈川県日中友好協会会員の私も僭越ながらその一人である。私は、15年程前、池袋駅西口へ出たところ、道路上で手にした中国関係の本を宣伝



コンクール受賞作品が掲載されている号

していた段躍中さんと出会って親しくなったのが縁で、2012年の第8回目コンクールから二次審査員を務めるようになった。第三次審査は、段躍中さんらがスマートフォンなどを使って会話を交わし、学生と生の音声審査を行う。こうした3度に亘る厳正な審査を経て始めて、最終的な成績結果が決まるのである。

〈ご褒美は日本訪問旅行〉

日本語作文コンクールで、最優秀賞(在中日本大使賞)と一等賞を受賞した中国人学生には、副賞の褒美として1週間の日本訪問旅行がプレゼントされる。2024年は作文のテーマが、「AI時代の日中交流」だったが、最優秀賞を受賞した大連外国語大学の林芳菲さんを始め、一等賞を取った天津外国語大学の林婧さんら、男女計6人の学生たちが2025年2月17日に来日した。埼玉県和光市の居酒屋で歓迎食事会が行われ、私も作文コンクールの二次審査員として招待された。歓迎会では、美味しい日本料理のフルコースをいただいた。中国人の大学生が立派な日本語で挨拶し、中には、将来アナウンサーになって国際的に働きたいという希望を持っている女子学生もいた。

ここで、一等賞を取った天津外国語大学の林婧さ

んの作品の一部を紹介する。

紅葉の美しさを歌った在原業平の短歌を例にして、百人一首の和歌の楽しみやカルタ取りを教えてください。先輩への思いを情緒豊かに綴り、身の周りの美しい日本語の物語を掘り下げたいと、述べている。

短歌が趣味の私は、高得点を付けた。

－＋－＋－＋－＋－＋－＋－＋－＋－＋－＋－＋－＋－＋－＋－＋

『ちはやぶる』

先輩に学び、日本語学習を頑張る

林婧

空港では、耳元に人の声が、遠くには飛行機の離陸する轟音が響いていました。飛行機が遠ざかってゆく空を眺めていると、自然とあの紅葉舞い落ちる国と、瞳の中が紅葉のような情熱に満ちた先輩が浮かんできました。劉先輩は、とうとう日本へ留学に旅立ちました。私は空に向かい頭を下げて、手にしていたハガキを見ました。別れる時に先輩がくれた紅葉のハガキです。裏面に「ちはやぶる かみよもきかず たつたがは からくれなゐに みずくくるとは」と書いてありました。先輩が大好きな和歌です。和歌を見ると、去年の夏に引き戻されました。

(中略)

『小倉百人一首』のびっしりと書かれた文字は、山林の中に幾重にも重なった紅葉かのようなです。彼女にとって、これはただのカードではなく、カードの歌、文字、それらすべてが日本語の魅力を語っているのではないのでしょうか。彼女の日本語に対する丁寧さや情熱も紅葉のような物でしょう。私も彼女に影響されて、いつも何も知らない子供のように好奇心を持ち、日本語の世界を探索しています。身の回りの美しい日本語の物語を掘り下げていきたいです。これから、ステレオタイプではなく新たな視点で見ようと決めました。劉先輩は彼女の物語に向かって憧れの国に旅立ちました。いつか、また彼女とカルタをしたいです。いつか、私も、この先輩からもらった憧れをもって、自分の「紅葉」と日本に再会したいと思います。

完

－＋－＋－＋－＋－＋－＋－＋－＋－＋－＋－＋－＋－＋－＋－＋

以上、日本語の素晴らしいこと！！ これだけの名文を中国人の若い大学生が書くとは！ 日本人でもなかなか書けるものではない。

〈西池袋公園で中国語のお喋り会〉



左から 段躍中さん 林婧さん 筆者

段躍中さんは、2007年8月から、毎週日曜の午後2時から5時までJR池袋駅のすぐ近くにある豊島区立西池袋公園で、誰でも参加出来る、中国語と日本語で勝手気ままにお喋りする“星期日漢語角（日曜中国語のまちかど）”と言う市民対話のイベントも主催している。これまでに延べ3万人が参加している。

“誰でも・何時からでも・無料で参加できる・日中交流の場”がコンセプトだ。“わんりい”の読者の皆さんも、たまには池袋まで出掛けて行って、上手でなくても良いから中国語で若者たちとおしゃべりして来てみてはいかがだろうか？

ところで、“わんりい”会員の須崎孝子さんから突然、電話が掛かって来た。私が2025年1月号に、田部井淳子さんと会ったことなどについて書いたのを読まれたからだった。須崎さんは、女性として世界で二番目にエベレストに登頂し、中国人としては最初に珠穆朗瑪峰に登頂したチベット族の潘多さんと親友であり、両登山家の対面実現に尽力された。潘多さんの自伝『潘多伝』も邦訳されている。

須崎さんは、貴州大学で長く日本語を教えていたことを褒めたたえられて、この『中国人の日本語作文コンクール』の優秀指導教師賞を2022年に受賞している。私との不思議な繋がりを知って、“哎哟ー！”と驚いた次第だ。

(完)



“日曜中国語のまちかど”の参加者

能楽のルーツと効用 —お能が身体に良いわけ—

福島 裕子 ひろこ

9年前にお能にハマリ、4年前に習い始めた。毎朝ひと差し舞って、体調をチェックしている。お能が身体に良いことを実感していて、それをお伝えするべくペンを取った。

まずお能のルーツだが、奈良時代にシルクロードを経由して中国から渡って来た「散楽」だと考えられている。日本で様々な変遷を経て、平安時代に「猿楽」が成立した。猿楽師たちは寺社で神事芸能としての「翁」を面をつけて演じた。室町時代、三代将軍足利義満の庇護のもと、観阿弥・世阿弥父子により能は大成したとされており、その歴史は七百年近い。

●お能にハマるキッカケ

私が初めて自分の意思でお能を見たのは2016年、横浜能楽堂プロデュース公演「生と死のドラマ」と言う4回のシリーズだった。老い、死者の行く末、生命とは、と言ったテーマで選り抜かれた演者と演目の見事な公演だった。

当時、私は長く介護した母を亡くしたばかりで心にぽっかりと穴が空いたようだった。そこで死者の魂が蘇る夢幻能に、強く惹きつけられるものがあった。

その公演は希望すればベイサイドのホテルでの会食をセットにすることが出来た。そこで夫も誘ってまず会食の場となった高級中華料理店に赴いたところ、上品な初老のご夫婦と相席になった。このご夫婦はお能に深い見識を持たれていてお能の魅力について色々教えてくれた。

私が関心を持ったのは、他の伝統芸能（歌舞伎や文楽）と異なり、お能は素人がプロの能楽師に教えを乞うことが出来るということだ。お能そのも

のは敷居が高いが、習うことが簡単に出来ると言うギャップが面白かった。しかもお囃子（笛、大鼓、小鼓、太鼓）、謡い、仕舞の中からやりたいことを選んで先生を探せば良いと言う。

美味しい中華を頂きながら楽しくお話しした後に見た「鸚鵡小町」は素晴らしかった。そしてその日私は決意した。「人生最後のお稽古事はお能にしよう」と。

●あさお謡曲研究会との出会い

お能を継続的に見るようになった私はその魅力をみんなに広めたくて、PTA仲間を募って能楽鑑賞会を何度か実施した。毎回30名近いお母さん・お父さんたちが参加してくれた。演目が初心者にも親しみやすく、しかもリーズナブルな国立能楽堂主催の能楽鑑賞教室に相乗りした。

最初に企画した鑑賞会は金春流による公演で、解説してくれたのは若手能楽師の中村昌弘先生。張りのあるお声でお話も分かりやすく、将来お能を習う

としたらこの先生につきたいと思った。

PTAを卒業してから、その先生が新百合ヶ丘で教えておられる「あさお謡曲研究会」のお稽古を見学させてもらった。まだコロナが完全に終息していない4年前のことだ。

グループレッスンと個人レッスンを組み合わせたやり方が良いと思った。諸先輩が指導を受けている様子を見ることが出来るので、それが大いに勉強になる。またみんなが見ている前で指導して頂くことで、発表会等の本番に備えられる。

見学した翌月には会に加えて頂き、その半年後には国立能楽堂の檜舞台に乗っていた。発表会は緊張すると言うよりも、いつも見ていたあの特別



2022年あさおサークル祭にて

な空間に、自分自身が立っていることが夢のようだった。

●お能は身体に良い

あさお謡曲研究会の先輩方は、姿勢が良く足腰が丈夫で発声も艶がある。お人柄も良くウィットに富んだ会話で会を和ませてくださる。あんな風に歳を重ねたいと言うお手本のような皆さんだ。

令和5年5月に、川崎市麻生区が男女共に長寿日本一となったと言うニュースが流れた。さもありませんと思ったのは会の先輩方のお顔が浮かんだからだ。お能を習うと足腰や腹筋が鍛えられ、遠くに響く良い声になる。美しい詞章を読み聴くことで想像力が醸成される。私自身、お能を習い始めてから心身共に健康を実感している。

●お能を楽しむコツ

お能は見るだけでも豊かな体験を得られるが、少しコツがある。事前に詞章を読んでおくのが理想だが、せめてあらすじは読んでおいてほしい。

何をどこで見るかも重要だ。ハズレが無いのは国立能楽堂の主催公演だと思う。公演月の前の月の10日から電話とネットでチケットが発売される。お能の公演は一部を除いて一回限りなので、発売日に完売と言うことも珍しくない。

お能を見ていると眠くなるとよく言われる。私自身、鑑賞中に居眠りすることもしばしば。お囃子と地謡の心地良いリズムに、自分の脳が反応したからだと思直っている。実際、居眠りから目覚めても、舞台が寸分変わらない状況であることも多いのが能だ。

最近習う曲にゆかりの場所を訪れると言う旅の楽しみも覚えた。近場では「六浦」ゆかりの金沢

文庫のある称名寺。京都はもちろんのこと、琵琶湖周辺にも能にゆかりの地は多い。京都に旅した折には三井寺などにも足を伸ばしてほしい。

全国には能舞台を持つ観光地も少なくない。そのひとつが厳島神社。桃花祭と言って毎年4月16日～18日、狂言を挟んで五番能で上演される。神社の昇殿料(¥300)だけで朝から晩まで好きなだけ見ることが出来る。海の上に浮かぶ能舞台での観能は格別な趣きがある。

●能を愛した人たち

織田信長もお能を愛した一人だが「人間五十年～」は幸若舞の『敦盛』だ。信長以上に能を愛好したことで知られるのは豊臣秀吉。彼が若き日に猿と渾名されたことと、能のルーツが猿楽なのは単なる偶然だろうか。

江戸時代、庶民は寺子屋で儒学の訓読ばかりで無く、能の謡も習い覚えたと言う。また北斎と写楽は能楽師だったと言う説もある。

明治維新後、武家の支援を失い能楽師たちは路頭に迷うが、救い主もいた。オペラにも匹敵する伝統文化としての価値を認めたのが岩倉具視だ。明治の文学者たちも能を愛した。夏目漱石、正岡子規、高浜虚子、泉鏡花等、枚挙に遑が無い。

●中国にゆかりのお能

現在上演されているお能は流派によって多少差があるが、約二百番とされている。その中に中国にゆかりの能はどのくらいあるだろうか。

お能の題材として最も知られているのは『平家物語』、後日談等も含めると三十余りになる。『源氏物語』由来の能も人気だが、こちらは十。そして中国由来の能の演目は、ちょうどその中間に位置している。

歴史物としての「項羽」「昭君」「楊貴妃」、仙人や伝説上の生き物が登場するものに「西王母」「一角仙人」「猩々」「石橋」、漢詩にまつわる「白楽天」「三笑」などなど。わりりの読者の皆さんはきっと私より詳しいに違いない。

お能を見ず嫌いの方がいたら、騙されたと思って面白そうな演目を見つけた時に、能楽堂に足を運んでみてほしい。元気で長生きするためにも。



厳島神社では毎春、桃花祭御神能が行われる

みんなの広場

和やかに新年会開催

2025年2月11日、わんりい恒例の「シェワンヤンロウ（羊肉のしゃぶしゃぶ）を楽しむ新年会」が、例年通り新百合ヶ丘駅近くの麻生市民館料理室で開催されました。

11時開会のご案内をしておりましたが、10時を過ぎるころから、ポチポチとお客様が来場し、お鍋の準備を手伝ってくださったり、久し振りに知人の顔を見つけて話し込んだりと、ウキウキとした雰囲気が醸し出されてきました。村上直樹さんが対聯を持って来て、飾りを手伝ってくださったので、しまい込まれていた“わんりい”の対聯と大扇も飾られて、すっかり新年会会場が出来上がりました。

定刻になり、コロナ禍を挟んで7～8年振りの京劇俳優、殷秋瑞さんに乾杯の音頭をお願いすると、京劇の舞台其の儘の力強い美声に、身体中の細胞が奮い立ちました。今年はきっと良い年です。

用意した材料をほぼ食べ尽くした頃、余興タイムが始まりました。今年は会員の福島裕子さんが自らご出演の他、時間全体の構成まで考えてくださり、福島さんの二胡とフルートの演奏、和田宏さんの独唱、いつも楽しい今井加代子さんのシャンソンは3曲も歌って頂きました。

今井さんのシャンソンが始まる前、入口辺りがざわついたようでしたが、歌が始まると、そこからダンスのカップルが登場しました。見ると、代表の寺西俊英さんと、今日のために特にお願いしたパートナーの糸山あや子さんです。本式なダンス用ドレスと靴を身に付けて、さっそうと現れ、音楽に乗って調理台の間を巧みにすり抜けて、素

敵なダンスを披露してくださいました。去年は急なリクエストで、寺西さんは、スリッパを脱いで踊りましたが、今年の足元はバッチリでした。

その後で、福島鳳琳さんが美しい押し花を使ったキーホルダーの製作を実演して女性にプレゼントしてくださいました。

それから、これも恒例のビンゴをしました。早くビンゴになった方が多かったです。結局時間内にビンゴにならなかった方が4名もおられました。その方々には、春になったら残り福が訪れるようにとわんりい事務局一同で祈念致します。

最後に、久し振りの殷秋瑞さんに京劇の歌を唄っていただきたいとお願いすると、殷さんは「霸王別姫」の中から霸王の歌を歌ってくださいました。眼を閉じると華やかな京劇の一場面が目に浮かんで来て、聞き惚れてしまいました。

最後の最後に、川崎市内で諸事お世話になっている山田賀世さんの締めで、新年会は無事終わりました。

新年会のお忘れ物です
綺麗な花柄の眼鏡ケースをお忘れです。
お心当たりの方は寺西までご連絡を！



薬膳料理の座学と講習会のご案内

春の薬膳料理講習会を4月18日に開催します。その前の準備として、ちょっと急ですが、3月5日に座学を行うので、以下の通りご案内致します。

＊薬膳座学＊

講師：趙 迪（中国河南省出身）
日時：3月5日（水）13：30～15：00
場所：玉川学園コミュニティーセンター
会費：500円
持物：筆記用具

料理講習会講師の趙迪さんが、講習会では伝えきれない薬膳の知識を教えてくださいます。質疑応答の時間も取っております。

~~~~~

2025年、わんりいが企画する、春夏秋冬・各季節の薬膳料理を教える講習会です。

### ＊春の薬膳料理講習会＊

講師：趙 迪（中国河南省出身）  
日時：4月18日（金）10：00～15：30  
場所：麻生市民館料理室  
会費：2000円  
持物：エプロン・頭巾・筆記用具

3月5日の座学は、この講習会を念頭に置いての勉強会です。この講習会に興味のある方は、お時間が許せば座学にもご参加ください。必須ではありませんが、講習会では、時間の関係で伝えられない知識を、座学で得ることが出来ます。

## ◇満柏画伯の漢訳俳句◇

春雨や  
ほうらい  
蓬萊の夢

かたみたる

松尾芭蕉

chūn yǔ mí méng yóu péng lái  
春雨迷蒙游蓬莱

cǐ jǐng nán wàng fāng zhī mèng  
此景难忘方知梦



## 【わんりいの催し】

♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！  
身体力を抜いて気持ちよく発声しよう！  
声は健康のバロメーター!!

\*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：玉川学園コミュニティーC 多目的室3
- 日時：3月18日(火) 10:00~11:30  
4月22日(火) 10:00~11:30
- 講師：Emme [エメ] (歌手)
- 会費：2,000円 (講師謝礼・会場費)
- 定員：15名 (原則として)
- 申込：☎042-735-7187 (鈴木)

~~~~~

*** 中国語で読む 漢詩の会 ***

漢詩で磨く中国語の発音！ 中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！

- 3月 確定次第メールにて連絡
- 4月 未確定
(3月に入ってから、メールにてご連絡)

- 講師：植田渥雄先生 桜美林大学名誉教授
- 会費：1,500円 (会場費・講師謝礼)
- 定員：20名 (原則として)
- 申込：☎090-1425-0472 (寺西)

Email:ukiuki65jppj@yahoo.co.jp
(有為楠)

~~~~~

### ∞∞ わんりいの中国語勉強会 ∞∞

- 場所：鶴川市民センター
- 日時：毎週火曜日 14:00~16:00
- 講師：郁 唯 (天津師範大学卒業)
- 会費：5000円 (会場費・講師謝礼)
- 定員：10名 (原則として)
- 申込：柳田 ☎090-4677-7793  
e-mail:yanagita\_hi@yahoo.co.jp

#### ■定例会 代表宅

- ▼3月13日(木) 13:45~
- ▼4月10日(木) 13:45~

#### ■‘わんりい’ 発送 三輪センター

- ▼3月号 3月2日(日)
- ▼4月号 4月2日(水)

## ☆☆ 編集後記 ☆☆

2025年も2か月が過ぎ去りました。3月も足早に去って行くことでしょう。

最近、地球的規模の気象変動中はますます激しくなり、もはや人為的な阻止は不可能な段階に達したと言われてはいますが、日本でも、今年に入ってから気象現象は激化しています。豪雪地帯でも、100年の観測史上、例を見ないドカ雪が降ったり、4月中旬ごろの陽気の日があったりと、過去100年の記録は最早参考にならなくなってしまったようです。日本の雪は、シベリア寒気団が日本海を渡る時に海面からの水蒸気を取り込み、日本の山脈に当たって、雪として降らせますが、最近の日本海は水温が高く、昇る水蒸気が例年の比ではなく、降る雪の量が記録的なのだそうです。

~~~~~

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎いたします

年会費：1800円、入会金なし

郵便局振替口座:00180-5-134011 わんりい

10月以降の入会は、当年度会費1000円

■問合せ：044-986-4195 (寺西)

‘わんりい’ 301号の主な目次

寺子屋 四字成語(80)「南柯一夢」最終回	2
「中原雑感」(49)鄭州・安陽一人旅 (続1)	3
晩秋のカラコルムにて (2)	5
「嶗山の伝説」	7
私の心に残る旅⑤	
「内モンゴルへの旅」(その1)	10
「中国薬膳の起源と発展」(1)	11
中国人の日本語作文コンクール	12
能楽のルーツと効用	14
みんなの広場	16
‘わんりい’の催し・お知らせ	18

